

青少年のためのレクチャーコンサート

大作曲家たちの友情と反目

Profile



渡辺 玲子 (ヴァイオリン)

Reiko Watanabe, Violin

超絶的なテクニック、玲瓏で知的な音楽性、切れ味鋭い官能性と幅広いレパートリーで、世界のヴァイオリン界をリードする逸材。1984年ヴィオッティ、86年パガニーニ両国際コンクールで最高位を受賞。以来、ロンドン、ウィーン、ドレスデン、ワシントン、ロサンゼルス、サンクトペテルブルクなど世界のオーケストラと共演。ニューヨーク在住。使用楽器は、日本音楽財団より貸与された1736年製ガールネリ・デル・ジェス「ムンツ」。

公式ウェブサイト <http://www.reikowatanabe.com>
facebookページ <http://www.facebook.com/reikowatanabevn>



江口 玲 (ピアノ)

Akira Eguchi, Piano

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。ジュリアード音楽院のピアノ科大学院修士課程、及びプロフェッショナルスタディーを修了。欧米及び日本をはじめとするアジア各国でのリサイタルや室内楽、協奏曲等で活躍する他、数多くのヴァイオリニスト達と共演を重ねている。

現在、洗足学園音楽大学大学院客員教授、東京藝術大学ピアノ科准教授。ニューヨークと日本を行き来して演奏活動を行っている。

オフィシャル・ウェブサイト <http://www.akiraeguchi.com>

主催/アトリオン音楽ホール

協力/日本音楽財団

NIPPON MUSIC FOUNDATION

Supported by  日本 THE NIPPON 財団 FOUNDATION

アトリオン音楽ホールを
ご利用下さいまして
ありがとうございます

♪手荷物、傘、コート類はクロークへお預け下さい。また、会場内にカメラ・録音機等を持ち込むことはできません。
♪ホール内での飲食・喫煙は固くお断りいたします。ホワイエや3階喫煙室をご利用下さい。
♪演奏中のホールへの入退場はご遠慮下さい。
♪音響に特に配慮されたホールですので、演奏者の集中力を損なわないよう、お客様にもご協力をお願いします。
お気付きの点がございましたら、ホールスタッフへお知らせ下さい。

青少年のためのレクチャーコンサート

大作曲家たちの友情と反目



ヴァイオリン
渡辺 玲子

©Yuji Hori



©Rikimaru Hotta

ピアノ 江口 玲

2012.11.6(火)

アトリオン音楽ホール
14:00開演 (15:20終演予定)



※この公演には休憩がありません

Program

1 歴史的な三角関係

ロベルト・シューマン：“F.A.E.” ソナタから第2楽章「間奏曲」(3分)

ブラームス：“F.A.E.” ソナタから第3楽章「スケルツォ」(5分)

クララ・シューマン：3つのロマンス op.22から第3番 (4分)

2 ヴァイオリンを弾く悪魔とピアノの巨人—世紀の二大ヴィルトゥオーゾ

パガニーニ：無伴奏ヴァイオリンのための24のカプリスから第20番 (3分)

リスト編曲 (シューマン作曲)：献呈 (3分半)

3 ラヴェルとガーシュイン

ラヴェル：ヴァイオリン・ソナタから第2楽章「ブルース」(6分)

ガーシュイン (ハイフェッツ編)：歌劇「ボギーとベス」より「サマータイム」(2分)

4 演奏家と作曲家—最も有名なヴァイオリンの名曲集

サン＝サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソ op.28 (9分)

サラサーテ：ツイゴイネルワイゼン op.20 (9分)



弦楽器名器と言えば1700年前後に製作された「ストラディヴァリウス」と「ガアルネリ・デル・ジェス」が有名であり、300年以上経っても今なお、最高の楽器として取り扱われている。これらの楽器が製作されたのは、日本の歴史でいうと江戸幕府5代将軍綱吉(1646~1709)から8代将軍吉宗(1684~1751)が治世した時代である。

日本に西洋楽器が持ち込まれたのは、それより前の1590年、長崎に無事戻った天正少年使節の4人は秀吉の前でヨーロッパから持ち帰った楽器を演奏、秀吉は大変感銘したと言われている。その中にはクラヴィコード(鍵盤楽器)、ハープ、リュート、レバック(ヴィオラ)等の楽器があったという。

アントニオ・ストラディヴァリ(1644~1737)は当時から今日に至るまで最も偉大な弦楽製作者とされ、「ストラディヴァリウス」は彼の製作による楽器である。バルトロメオ・ジュゼッペ・ガアルネリ(ガアルネリ・デル・ジェス)(1698~1744)は、ストラディヴァリと並んでヴァイオリン製作界の双璧と称されている。ガアルネリ一族からは何人かの名工が輩出しているが、今日ガアルネリの名器といえばバルトロメオ・ジュゼッペが製作したものをさし、「デル・ジェス」として親しまれている。「デル・ジェス」とは、「イエスの」という意味で、楽器の内側のラベルにある、イエス・キリストを表すIHSの符号と十字架に由来している。

時代を越えて受け継がれてきた名器「ストラディヴァリウス」と「デル・ジェス」には、それぞれ過去の著名な所有者や楽器の特色に因んだニックネームが付けられている。本日、渡辺玲子さんが演奏する楽器は、日本音楽財団保有のガアルネリ・デル・ジェス1736年製ヴァイオリン「ムンツ」。イギリスの収集家ムンツ氏が所有していたことから、この名前と呼ばれている。

Program Notes

ロベルト・シューマン：

“F.A.E.” ソナタから第2楽章「間奏曲」

ブラームス：

“F.A.E.” ソナタから第3楽章「スケルツォ」



ロベルト・シューマン
(1810~1856)



ヨハネス・ブラームス
(1833~1897)

ロベルト・シューマンとブラームスはドイツ・ロマン派を代表する作曲家。ブラームスはバッハ、ベートーヴェンと並んでドイツ音楽における“三大B”と評されている。この“F.A.E.”ソナタは、シューマンとブラームス、そしてその友人で門下生のアルバート・デイトリヒによる合作(1楽章がデイトリヒ、2楽章と4楽章がシューマン、3楽章がブラームスによる作曲)。ヴァイオリニストである友人のヨアヒムを歓迎する目的で作曲された。F.A.E.とは、ヨアヒムのモットーであった「自由に、しかし孤独に Frei aber Einsam」という言葉の頭文字F、A、Eのことで、それらをファ、ラ、ミの音として作曲にあたっての共通テーマとして用いられた。それぞれの楽章によって作曲家の個性が表出しており、ヨアヒムも各楽章の作曲者を明確に言い当てたという。なお、シューマンは後に1、3楽章を独自に作曲し、この2、4楽章とともにヴァイオリン・ソナタ第3番としている。

クララ・シューマン：

3つのロマンス op.22から第3番



クララ・シューマン
(1819~1896)

クララ・シューマンは、9歳でピアニストとしてデビュー。後にはドイツ中で天才少女として知られるようになり、作曲家としても活躍した。20歳のときには父の反対を押し切ってロベルト・シューマンと結婚した。一説によるとシューマンの死後は親交の深かったブラームスと恋愛関係に落ちたと言われているが、証拠も無く定かではない。この作品は1853年、クララが34歳の時に作られた。曲はいずれもシューマン夫妻の幸せな結婚生活を思わせるような、温かく可憐な美しさに満ちている。

パガニーニ：

無伴奏ヴァイオリンのための24のカプリスから第20番



ニコロ・パガニーニ
(1782~1840)

ニコロ・パガニーニはイタリアのロマン派作曲家。天才ヴァイオリニストとしても知られていて、5歳から13歳までにヴァイオリンの技術を完璧に習得し、そのあまりの早熟ぶりのため“悪魔に魂を売り渡した”などという噂も流れた。このカプリス(フランス語できまぐれ、という意味)は、全部で24の無伴奏ヴァイオリン小品集で構成される。いずれも簡潔な曲想で、ヴァイオリンの表現技巧がふんだんに盛り込まれている。リストはこの曲を元にパガニーニ大練習曲を、シューマンは練習曲を、ブラームスやラフマニノフも変奏曲を作曲していることから、大変な魅力を持った作品集であることが分かる。

リスト編曲(シューマン作曲)：献呈



フランツ・リスト
(1811~1886)

天才音楽家フランツ・リストは今から約200年前、ハンガリーに生まれた。19世紀最大のピアニストとして、作編曲家として、そして指揮者として、生涯に渡ってその才能を存分に発揮した。リサイタル形式の演奏会を初めて行った音楽家とも言われている。この献呈は、シューマンの歌曲集「ミルテの花」の第1曲。1840年、シューマンとクララとの結婚式の前日、ミルテの花を添えてクララに捧げられた曲。その後、リストが1848年、ピアノ独奏用に編曲した。原曲が持つ良さもさることながら、リストらしい大変豪華なピアノ作品としても楽しむことができるのではないだろうか。

ラヴェル：

ヴァイオリン・ソナタから第2楽章「ブルース」



モーリス・ラヴェル
(1875~1937)

ラヴェルはフランスの作曲家。スイス出身で発明家で実業家の父と、バスク人の母の熱心な音楽教育を受け、パリ音楽院へ進む。在学中、フォーレやペサールのもとで学び、多くの若く革新的な芸術家と行動を共にし、影響と薫陶を受ける。ラヴェルの管弦楽法は「ダフニスとクロエ」などに代表されるように、精密かつ緻密で、ロシアの作曲家ストラヴィンスキーに「スイスの時計職人」と言われた程だった。また、その作風は古典的な形式に立脚していることが認められる一方で、スペイン音楽やアメリカのジャズなどのスタイルを取り入れるなど、独自のものであった。このヴァイオリン・ソナタの第2楽章はそのジャズへの関心の最たるものであると言える。

ガーシュイン(ハイフェッツ編)：

歌劇「ボギーとベス」より「サマータイム」



ジョージ・ガーシュイン
(1898~1937)

ガーシュインは「ラブソディ・イン・ブルー」や「パリのアメリカ人」などで知られる、アメリカを代表する作曲家。クラシックとジャズの融合を果たし、いわゆるアメリカ音楽を完成させた。39年の短い生涯の中で、50曲余りのミュージカル作品、200曲もの歌曲を残している。このボギーとベスは、ガーシュインの兄アイラと小説「ボギー」の原作者による台本に曲が付けられたオペラ。1920年代の南部に住む貧しい人々の生活が描かれており、黒人霊歌などの雰囲気も盛り込まれている。その中で演奏されるこのサマータイムはその中でも最も有名な曲で、様々な楽器で演奏されている。本日の演奏は、20世紀を代表するヴァイオリニスト、ハイフェッツによるヴァイオリン演奏用のアレンジ楽譜を用いている。

サン＝サーンス：

序奏とロンド・カプリチオーソ op.28



カミーユ・サン＝サーンス
(1835~1921)

サン＝サーンスはフランスの作曲家、オルガニスト、ピアニスト。モーツァルトのように神童と称され、音楽以外の分野でも天文学や数学、絵画、詩などの分野でその才能を発揮した。音楽では組曲「動物の謝肉祭」や交響詩「死の舞踏」、交響曲第3番、そしてこの序奏とロンド・カプリチオーソが代表作として良く知られている。前述の通り作曲だけではなくピアノ奏者としても活躍したサン＝サーンスは、同じ時代に活躍していた超絶技巧のヴァイオリニスト、サラサーテのためにこの曲を作った。サラサーテはこの曲をヨーロッパ中で演奏し、以来ヴァイオリン演奏の重要なレパートリーとして定着した。

サラサーテ：ツイゴイネルワイゼン op.20



パブロ・サラサーテ
(1844~1908)

サラサーテは軍楽隊の楽長を父に持ち、19世紀後半にスペインに生まれた。幼い頃からロッシニに「巨人」と言わしめるほどの実力を持ち、天才的なヴァイオリニストとして今日にも名を残している。その実力は多くの作曲家のインスピレーションに訴えかけるほどのものであり、捧げられた曲も大変多い。広範囲にわたる演奏旅行では莫大な財産を得たが、大半は慈善事業に投じられた。このツイゴイネルワイゼンは「ロマの旋律」という意味で、正に民族的である。彼の代表作であり、その劇的な作風と技巧的なパッセージは聴く人に強烈な印象を与える。